

1. 研究計画・目的

報告者は、英語の歴史において「使役」（「～に～させる」）と「勧誘」（「一緒に～しよう」）という表現が現代英語では *let* や *let's* により表されることに着目し、両概念の関連を明らかにすることを研究内容としている。在外研究開始の数年前より、報告者は「勧誘」の形式が出現する文脈を詳しく読み込む必要性を感じていた。特に「勧誘」概念の根底にある「奨励」（*exhortation*：話者が聞き手に、ある行為をするように呼びかけること）の概念が文献上どのように表されるかという研究に従事していた。

在外研究の機会を得た際、報告者は上記の研究を題材に、英語学とゲルマン語学両方の知見を深化させたいと思っていた。英国ケンブリッジ大学（University of Cambridge）は中世の言語文化を総合的に研究する環境として好適であり、研究者との交流から研究内容を発展させることを計画した。また英語教員として在外研究終了後に英国での研究や生活の経験を学生への教育に還元したいとも思った。この意味でも、伝統ある学術都市であるケンブリッジを滞在先として好適と考えた。

2. 研究活動

滞在中「使役」・「勧誘」のテーマについていくつかの研究を進めたが、ここではその中心となる「奨励」概念の研究につき記す。特定の古英語文献とそれに似た主旨を持つ古高ドイツ語の文献を題材に、「奨励」概念がどのように表現されるかを考察した。古英語文献は『キリスト教徒的生活への奨励』（*An Exhortation to Christian Living*）という詩、古高ドイツ語文献は『キリスト教徒への奨励』（*Exhortatio ad plebem Christianam*）という散文（ラテン語文献からの翻訳）を対象にした。両文献を精読し、話者がそれぞれどのように聴衆に向けて望ましい行いをするよう呼びかけているかを分析した。以下の記述は、現地での研究生活についても含む。

2.1. 1 年目（2023 年度）

1 年目はケンブリッジ大学の英語学部 ASNC（Faculty of English, Department of Anglo-Saxon, Norse and Celtic, 以下“ASNC”と略す）を訪問機関とした。報告者は Visiting Scholar として Richard Dance 教授（古英語・古ノルド語）から手厚い待遇を受けた。普段は主に英文学部図書館（English Faculty Library）や大学図書館（University Library）における資料収集や文献研究を行った。また中世の写本について学んだ。ケンブリッジでは本研究が対象とする古英語文献の写本（Corpus Christi College MS 201）を閲覧した。6 月にはロンドン大学開講の写本入門の集中講座 London International Palaeography Summer School に参加し、写本の構成や記述方法の知識を身に着けた。8 月にはドイツのミュンヘン、バイエルン州立図書館にて本研究が対象とする古高ドイツ語文献の二つある写本の一つ（Clm 6244）を閲覧した。9 月はオクスフォード大学ボードリアン図書館にて「勧誘」表現の研究関連で 13 世紀の写本（MS. Bodl. 652）を閲覧した。

Dance 教授には多方面でお世話になった。本研究遂行のご支援のみならず、ASNC で開講されている古英語演習授業の聴講許可も頂いた。1 コマ 60 分、Michaelmas, Lent, Easter という三学期（Term）で 8 週間ずつ行われる授業の体験は、報告者が経験している日本の大学のものとは枠組みも密度も異なる、新鮮なものであった（ただし聴講は Michaelmas Term と Lent Term の

み)。またケンブリッジ大学の独特なカレッジでの研究生生活を経験したくなり、Dance 教授からのご推薦により教授の所属する St Catharine's College (1473 年創立) における Visiting Scholar になることができた。カレッジでは学生、教員、訪問研究員が各種施設 (図書館、食堂、チャペル、教員用ラウンジなど) を利用し各自の専門分野を越えて交流し、学際的な雰囲気が漂う。こうした環境に一時期でも身を置くことができ、幸運であった。

2.2. 2 年目 (2024 年度)

在外研究の延長が認可され、2024 年度も引き続き、英語やゲルマン系言語について今後広く研究を行う契機を多く得た。当年度は「現代・中世言語および言語学部」(Faculty of Modern and Medieval Languages and Linguistics : 「言語学部」と略す) のドイツ語部門にて研究を行い、受入研究者 Sheila Watts 准教授 (ゲルマン語学) にお世話になった。Watts 准教授の指導学生とともに、古英語以外のゲルマン諸語文献を講読した。ここでは古フリジア語や古低フランク語といった、日本ではさほど研究されていない言語にも接した。7 月には言語学研究の盛んなオランダのライデン大学が開講する言語学集中講座 (Leiden Summer School in Languages and Linguistics) にて、サンスクリット語、古フリジア語、ルーン文字 (ゲルマン民族の古代文字) の講座を受講した。秋には Dance 教授の開講する古ノルド語演習の聴講を許可された。在外研究期間の終盤はスコットランドの詩人 Robert Burns の言語にも興味が生じ、帰国直前にスコットランドを訪れた。

今年度はもう一つのカレッジを経験した。St Catharine's College における研究員資格が 2024 年 9 月末で終了した。複数名の研究者からのご推薦を頂き、同年 10 月より Clare Hall (1966 年創設) の Visiting Fellow の資格を得た。ここの所属学生は大学院生 (Graduate students) に限られている。また海外からの訪問研究員受入に積極的であり、毎年研究員募集が行われている。このように St Catharine's College とはまた異なる雰囲気のカレッジを見ることができた。

3. 研究成果

以下、1 年目と 2 年目の研究成果を略述する。

3.1. 1 年目 (2023 年度)

古英語詩『キリスト教徒的生活への奨励』と古高ドイツ語散文『キリスト教徒への奨励』につき、両言語の文献は対象となる聴き手が異なるが、話者が聴衆に宗教上望ましい行いをするよう呼びかける面は共通している。各種の命令文や「義務」を表す法助動詞 (現代英語の *should* に相当) の他に新たな話題を導入する副詞 *nu* 'now' や聴き手のキリスト教徒としての当事者意識を喚起する定型表現 (formula) を含めた様々な要素が説得的な内容を成していることを見出した。この内容は Dance 教授のご提案により ASNC と St Catharine's College における講演 (11 月と、翌年 1 月) の形で発表した。

3.2. 2 年目 (2024 年度)

前年度の研究から得た知見を様々な研究へと発展させた。主な成果は三点ある。一つ目に、古英語文献における「奨励」の伝え方の研究を進めた。古英語詩『キリスト教徒的生活への奨励』

と同じくキリスト教徒としての正しい行いを呼びかける詩に、『キリスト教徒への指導』(*Instructions for Christians*)がある。両者は主旨が類似しているものの、多様な語彙や表現形式により両者の宗教的メッセージの伝え方における調子(トーン)の違いがあることを述べた。この内容を6月にロンドン、ウェストミンスター大学にて開催された国際学会第14回 ICHLL (International Conference on Historical Lexicography and Lexicology)にて発表した。

二つ目は、Clare Hallにおける2025年2月の講演会を挙げる。古英語詩『キリスト教徒的生活への奨励』が収録されている写本では、聖書の一節「主の祈り」(*The Lord's Prayer*)に基づく詩が続いている。同じテーマに基づく詩が古英語には別に二つあり、それぞれ長さが異なる。更に古高ドイツ語と古サクソン語の諸文献にもこの一節を題材とした詩がある。これらを踏まえ、各文献の言語的特徴に目を向け、各文献ごとの性質によって同じ題材でも語りの違いが生まれていることを述べた。

三つ目は英語以外を対象とした研究で、古フリジア語における副詞 *nu* 'now'について扱った。フリジア語はオランダ北部で現在も用いられており、古フリジア語は古英語と時代は異なるが文法的類似点が多い。同国レーワルデンにあるフリジア語研究所 (*Fryske Akademy*)にて、第13回フリジア語研究会 *Dei fan de Fryske Taalkunde* が10月に催された。報告者はここで研究発表を行い、古フリジア語の副詞 *nu* もまた話題転換の機能を持つことを述べた。

また、本研究テーマについての「成果」ではないものの、在外研究の2年間で経験したケンブリッジにおける様々な人々との交流も特筆に値する。ASNC や言語学部の学生との勉強会における交流からは、様々な学問的関心の方向を学んだ。訪問した両カレッジの所属学生、教員や他の訪問研究員からは自らの研究視点のみならず、その他の学問分野へも興味・関心を向ける姿勢の大切さを学んだ。大学の日本語会話ボランティアプログラムにて出会った日本語を熱心に学ぶ学生との対話や、加入していたケンブリッジ大学合気道部の部員(学生・社会人)との交流からは、外国の人々の日本への関心の高さを感じるとともに、日本についてより多くのことを説明できる必要性を感じた。現地では日本人との交流の機会も多く、他大学所属のサバティカル滞在者、課程留学生など様々な背景や専門分野を持つ人々と出会った。彼らの研究内容やケンブリッジにて研究を行うこととなった動機など、興味深い情報を得た。

4. 今後の展望

帰国後、在外研究中に得た成果を更に形にする作業を行っている。目下査読中、または投稿準備中の研究論文がいくつかある。これらは業績として挙げることはまだできないが、従来の「使役」・「勧誘」表現の研究領域を発展させることを期待する。

また今後は専門分野だけでなく英語史上の他の時代や研究対象にも、興味・関心の幅を広げたい。報告者はこれまでの反省として、普段から自分の分野関連の研究に閉じこもり、好奇心の幅が狭まってしまう嫌いがある。まだこれを完全に改善できたとは言えない。そのため古英語のみならず、その他の時代の英語にも目を向け、新たな分野の研究にも積極的に取り組んでいきたい。何かを学ぶきっかけは、どんなものがいつどこから飛び出すかわからないということを、日頃ケンブリッジにて様々な人々と交流する中で実感した。

5. 教育への効果

本学の職務復帰後、在外研究で得た経験を授業にて学生たちに話し、授業内容を充実させるように努めている。今年度は和泉キャンパスで1・2年生対象の英語授業を主に担当している。イギリス生活の面白さや困難さを話すことで、学生たちに海外留学への興味を呼び起こすようにしている。また海外にて感じた、日本について当たり前に感じているものについてわかりやすく伝えることのできる能力の必要性もアピールしている。授業では日本の事物に対し、その魅力を英語で説明できるような演習を取り入れている。学生たちが在学中、あるいは卒業後、海外との接点を積極的に見出し、日本のコミュニケーターとして世界的に活躍できることを望む。

6. おわりに

長期に亘り研究に従事することをお認めくださり、送り出してくださった本学商学部の教員の皆様、また在外研究に関しご支援を頂いた商学部事務室や研究知財事務室の職員の方々に、心より感謝を申し上げます。今後も各教員が海外にて研究のリフレッシュを行うだけでなく、半ば「学生」になりきり自らの専門以外の分野も学べる機会を定期的に得られるよう、制度の充実を望みます。